

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

PERIL, Bob Woodward and Robert Costa, (xxviii + 482pp) Simon & Schuster, 2021

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2023-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 袖川, 裕美 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00008088

PERIL, Bob Woodward and Robert Costa, (xxviii + 482pp) Simon & Schuster, 2021

袖 川 裕 美

本書は、アメリカのドナルド・トランプ政権の終わりとジョー・バイデン政権の始まりという、米史上最も騒然となった政権移行に焦点を当てたもので、トランプ政権を描くボブ・ウッドワードの *FEAR* (2018)、*RAGE* (2020) に続く三部作の最後の作品 (ロバート・コスタと共著) である。ウッドワードは、これらの作品によって、トランプ政権の実相を明らかにしていく。*PERIL* では、2020年米大統領選で再選を目指す共和党のトランプ大統領とこれに対する民主党のジョー・バイデン氏の選挙戦、トランプの敗北と権力への執着、それが頂点に達したともいえる2021年1月6日の米議会議事堂襲撃事件、そしてバイデン新大統領による初期の政権運営が描かれている。中心人物はもちろん2人の大統領であるが、政権幹部や側近たちの動きも見逃せない。

トランプを扱った作品は、他にもマイケル・ウルフの *Fire and Fury: Inside the Trump White House* (2018) など多数あり、読書嫌いを公言しているトランプが、皮肉なことに出版界を賑わせてきた。これらの作品のなかで、トランプ・ウォッチャー中のウォッチャーであるウッドワードの三部作は、膨大な取材に基づく、情報の豊富さで他を圧倒する。トランプは、いまだ過去の人ではなく、2024年大統領選をにらむ未来の人になるかもしれないのだ。分断されるアメリカの政治・社会を知り、ひいては国際社会の今を知るうえで、トランプ理解は欠かせず、本書はきわめて重要な資料を提供している。ただ欲をいえば、登場人物が多岐にわたるので、人物相関図でも付記されていれば、読者の理解の助けになっただろうとは思う。また、放送同時通訳者でもある筆者にとって、本書から報道の陰に隠れた情報を得ることは、アメリカや国際情勢への理解を深めるだけでなく、英語の一般的な語句の特殊用法を理解するうえでも役立ち、その点からも本書を高く評価したい。

調査報道の王道

本書を論考するにあたり、まず、前の二作品の概要を示す。

1) *FEAR: Trump in the White House*, (xxii + 420pp), Bob Woodward, Simon & Schuster, 2018

トランプ政権を描いた最初の作品である。タイトルは、ウッドワードとコスタのインタビューに答えたトランプが “Real power is – I don’t want to use the word – fear.” (真の力とは – こ

の言葉は使いたくないのだが（恐怖だ）と、発言したところから来ている（*FEAR* xiii）。本書では、トランプ政権の実態が克明に描かれ、政権初期の混乱や驚くべき話が多数紹介されている。中でも、最初の章で、韓国との貿易協定から撤退することを主張するトランプに対して、こんな賢明でない決断をさせてはなるまいと、国家経済会議のゲーリー・コーン委員長やロブ・コーター秘書官が大統領の机の中から署名用の書類を引き抜いたという話には、あ然とした。しかも、トランプは自分の決断を覚えていないので、こんなやり方が機能したという。初期の混乱についてはマスコミで伝えられていたが、これは聞きしに勝る。

トランプについては、弁護士のジョン・ダウドが f... liar（クソ嘘つき）と言い、レックス・ティラーソン国務長官は f... moron（クソバカ）、首席補佐官のジョン・ケリーも idiot（バカ者）、ジェームズ・マティス国防長官も a 5th or 6th grader（5-6年生並み）と言っている。コーンも a professional liar（プロの嘘つき）と呼んだ。著名ジャーナリストの記述でなければ、単に面白おかしくするための“盛り”話ではないかと思わせる発言である。加えて、単なる嘘つき以上の兆候を見る精神科医たちの告発まである（リー 2018）。それでもトランプの岩盤支持者の熱狂は変わらず、どんなに幹部が入れ替わろうと、陰のヒーローたちの尽力で政権は維持運営されていった。

2) *RAGE*, Bob Woodward, (xxii + 452pp), Simon & Schuster, 2021

2作目の *RAGE* は、コロナ禍と戦後最大の経済危機、人種差別反対運動の激化に直面したトランプに対して、ウッドワードが7か月間で17回行ったインタビューを核に、トランプ政権を総括している。前作の *FEAR* では、トランプはウッドワードのインタビューを拒否し、ウッドワードを scam（いんちき）、Dem operative（民主党の秘密諜報員）（*RAGE* p.390）と呼んでいたが、ここでは一転してインタビューに応じた。トランプは自分が信頼できる情報源になろうとしたらしいが、“It would be an honor to get a good book from you, but that probably won't happen.”（p.345）（いい本を書いてくれれば名誉なことだが、そうはならないだろう）とも言っている。

そして、トランプの予想通り、ウッドワードはトランプの個人的衝動に根差した政治を明らかにし、本書を衝撃的な一文で締め括った。Trump is the wrong man for the job.（トランプはこの任にあらず）。

なお、本書では、北朝鮮問題も多く取り上げられている。トランプと金正恩総書記の交わした27通の書簡のうち25通が本書で初めて公開された。両首脳が顔を合わせたのは4回だが、本格的な米朝首脳会談は2回である。筆者は、両会談後のトランプの記者会見を2回ともフジテレビで同時通訳したので、後追いであっても、背後の細かな流れを確認できたことは有益だった。また前作同様に、マティス、ティラーソン、ダン・コーツ国家情報長官ら幹部が、政権と国のため、それぞれの立場で尽力する姿は心打たれた。

これら二作品に続く *PERIL* は、プロローグの米中・軍トップによる緊迫したホットラインから始まる。2021年1月6日の米議会襲撃事件の2日後に、米制服組トップのマーク・ミリー統合参謀本部議長が中国人民解放軍トップの李作成上将に連絡。超大国アメリカが不安定化し、合理的判断力を失ったトランプが軍事攻撃を仕掛けかねないと危惧する中国指導部に対して、問題ないから安心してほしいと伝えたのである。襲撃事件は異常事態ではあるが、対立国の軍トップに連絡を取って説明するとは、驚きで、安堵もした。こうした情報までも入手するウッドワードらには脱帽である。ミリーの行動を知ったトランプは、即座に「裏切り」と反応したというが、ミリーを国民的英雄と受け止めた人も多かった (Elving 2021)。

本書は、その後、議会襲撃事件に至るまでの出来事を4年前にさかのぼって描いていく。大統領選に向けたトランプとバイデン両陣営の動きや思考が、断片的に、ときに奥深く、同時進行でフォローされる。見出しのない71の各章は短く、場面展開も早く、「紙芝居」のようでもあるが、当初はばらばらに見えた「物語」が徐々に大統領選へと収斂していく。

こうした叙述を支えるのが、膨大な取材と調査に基づく再現性である。臨場感あふれる直接引用の多さが目を引く。日本語訳からも十分に伝わるが、原文の英語では *f...* を使った忌み言葉も頻出する。脚本を読んでいるようだという書評もあった (Elving 2021)。本書の「読者へのメモ」によると、200人以上の関係者にインタビューを行い、ほぼ全員が録音に同意したという。メモ、電話記録、日記、メール、会議記録などの私的記録や政府資料などの情報源が巻末に明記されていて、これらが「物語」の真実さを担保している。インタビューに応じた人たちが内情や秘密を漏らすのは、ウォーターゲート事件でリチャード・ニクソン大統領を辞任に追い込んだ調査報道¹の名手ウッドワードへの信頼や敬意があるからではないか。さらには *deep throat* (内部告発者)²を正義(ヒーロー)と捉える米文化も関係しているかもしれない。そして、三部作のなかで本書だけがワシントンポストのコスタ記者(36歳)との共著であることから、ウッドワードが自身の確立した手法を次世代に伝えようと意図したのではないかと想像される。ただ、コスタがどのような役割を担ったのか、具体的な説明がないのは残念である。

また、こうしたスタイルに批判がないわけではない。場面の再現性について、誰かが思い出して言ったのか、誰かが他の人の言ったことを話しているのか、区別がつかないというのだ (*The Economist* 2018: *FEAR* の書評だが、本書にも通じる)。しかしながら、発言は実名で記載されている。問題があれば訴訟になるだろうが、そういう話は聞かない。

むしろ、本書で描述されたことが、後日、公式に確認された事例がいくつもある。トランプの側近だったビル・バー司法長官は、ロバート・ムラー特別検察官による大統領弾劾調査(2019)のときにはトランプを強力に擁護したが、「選挙が盗まれた」といい募るトランプを前にして、最後は「不正を示す証拠はない」と言って、政権末期に辞職した。議会襲撃事件を調査する下院特別委員会の公聴会でも、バーは、トランプ自身、敗北を認識しながらも、不正行

為があったとの虚偽の主張を続けたと証言した。

上級顧問を務めた娘のイバンカでさえ、本書ではマイク・ペンス副大統領に同情し、トランプを擁護しきれなくなる様子が描かれていて、公聴会でもバーの「不正否定」発言を支持した。

さらに、本書では、襲撃のさなか、トランプがホワイトハウスのテレビで状況を知りながら、暴徒化した支持者を鎮静化させるために行動するどころか、ツイッターで、選挙結果を覆そうとしないペンスを臆病者と呼び、暴徒を煽ることとなったと書かれている。これが9回目(2022年10月)の公聴会でも確認された。

描かれた peril (危機)

2020年、世界は新型コロナウイルスの感染拡大に見舞われ、多数の犠牲者が出て、深刻な経済的打撃を受けた。トランプが、新型コロナについては早い段階で危機を知りながら、過小評価し続けたことはよく知られている。こうしたなかで、人種差別反対運動 Black Lives Matter (黒人の命は大切だ) が起きる。また、シャーロットビル事件では極右集会の参加者とこれに抗議する人たちが衝突。トランプは白人至上主義擁護の姿勢を鮮明にした。

だが、これが契機となって、バイデンは大統領選に三度目の立候補を決意する。大統領選の報道は、存在感のある現職のトランプに集中しがちだが、本書ではバイデン側の動きや戦略も描かれていて、選挙戦が進むにつれ、実はバイデン勝利が確実視されていたことが分かる。特にバイデンが、民主党のジェームズ・クライバーン下院院内幹事に、当選の暁には最高裁判事に黒人女性を任命すると約束したことが、予備選挙での民主党内の承認に弾みをつけ、アフリカ系の得票につながった。トランプが、選挙前から“選挙の不正”を言いたてていたのは、負ける可能性が高いことを意識したからだった。

そして迎えた大統領選。これですべてが決着するはずだった。だが、危機はその先にあった。選挙に敗れたトランプがこれを認めず、あらゆる手段を使って結果を覆そうとしたからだ。ぎりぎりまでトランプを支えてきた側近が、次々と力尽きて離れていく。上述のバーもそのひとりである。

ただ、トランプは、選挙直後は、少なくとも内心では敗北を認めざるを得ないと思っていたようだ。しかし、一期目の選挙で選挙対策本部長を務めたケリーアン・コンウェイやルディ・ジュリアーニ弁護士らの“励まし”により、トランプは勝利に固執していく。ある意味、トランプは踊らされたのかもしれない。

また、本書には、普段はあまり取り上げられないペンスにも焦点が当てられた。上述のように、選挙結果を覆すよう圧力をかけられても応じなかったペンスは、「ペンスを首吊りにしろ」と叫ぶ襲撃事件の暴徒らに追われるが、危機一髪で難を逃れる。他には、副大統領職を終えたペンスと夫人が主催するスタッフとのお別れ会や、バイデン大統領就任式に出席する場面もあ

り、トランプの側近中の側近だったペンスの苦渋の選択が描かれている。

バイデン新政権については、アフガニスタンからの米軍撤収に関して、大統領、情報当局、国防省、国務省のそれぞれの見解が取り上げられていたのが興味深かった。撤収はバイデンの“失策”とされるが、筆者はむしろ情報当局の見通しの甘さが原因だったのではないかと思っていたので、最悪のシナリオも提示されていたことを知って、やや驚いた。また、バイデンが完全撤収にこだわったのは、これが歴代の政権の課題であり、バラク・オバマ政権時代の副大統領としての経験があったことが大きかった。さらに、前作の *RAGE* で詳述されているように、トランプも、側近の反対を押し切って、アフガニスタン撤収を断行しようとしていた (*RAGE* p.69, p.121, p.140, p.194)。両者は、視点は違っても撤収することでは一致していたのである。

結局、バイデンは撤収を断行するが、その後の混乱は報道されたとおりである。ワクチン接種の推進や大型予算の可決など順調に滑り出したバイデン政権が、ここで大きくつまずく。

英語の常套句の新たな解釈

本書が、放送通訳者としてBBCやCNN等に関わってきた筆者にとって、有益だったことも加えたい。トランプ政権下では、ティラーソンや他の要職スタッフにツイッターで「ハイ、解雇」というようなことがあまりにも多く、誰がどうなっているのか混乱したが、本書で何が起きていたのか確認できた。

また、背景事情を知ることが、英語の理解にも役立った。例えば、筆者は、アフガニスタンからの米軍撤収の際に使われたバイデンの *over-the-horizon capacity* の訳語にしばし悩んだ。*over the horizon* は、一般には「水(地)平線のかなたに」という意味だが、ここでは当てはまらない。他のバイデンのスピーチ等から、最終的に、意味は「米軍のプレゼンスがないなかで、米軍の派遣もせずに」で、訳語はシンプルに「遠隔の」くらいが適当であろうと考えた³。しかし、本書を読むと、撤収がもたらす最悪の事態について検討されるなかで、バイデンが *an over-the-horizon capability* の構築を望むと述べ、*monitoring and attack capabilities from neighboring countries* (近隣諸国からの監視と攻撃力)を意味すると具体的に書かれていた。これなら明確である。一方、本書の日本語版の翻訳者である伏見威蕃は、オーバー・ザ・ホライズンとルビ付きで「見通し外」との訳語を当てている。*over the horizon* から想像される言葉のニュアンスを表現しようとした訳語と思われるが、返って“見通しが悪い”という負の意味合いが出てしまうのではないか、バイデンはこの言葉に遠くからでもコントロールできるという積極的な意味を持たせたかったのではないか。筆者はそう考え、個人的には「遠隔能力」との訳語で問題ないと確信をもったが、複数の視点を得て、この言葉への理解が深まった。

peril (危機) の意味

バイデンは、大統領就任式の演説で、We have much to do in this winter of peril. (この危機の冬にやらなければならないことは多々ある) と述べた。この peril が本書のタイトルになっている。ここでいう危機は、直接的には議会襲撃事件を指すが、権力奪取の試みが民主主義の牙城であるアメリカで起きたことは、民主主義全体の危機を意味する。

加えて、アフガニスタンからの米軍撤収でタリバン政権が誕生したことは、バイデン政権の“失策”となり、アメリカの弱体化と受け止められた。これがロシアの独裁的ウラジミール・プーチン大統領によるウクライナ侵攻につながったことは否めず、現代世界の危機の重大な要因になっている。

本書はトランプ復活を示唆し、Peril remains. (危機は続いている) で終わる。その示唆通り、トランプは、今も共和党に影響力を残し、11月の中間選挙、2024年の大統領選に向けて存在感を示し続けている。

だが、一方のバイデン政権も、米軍撤収や物価高で支持率低下に苦しみつつも、失地挽回に務めてきた。中絶の権利を認める判決を覆した連邦最高裁に反発する人々を引きつけ、燃料費の高騰が和らいだことや気候変動対策・税制改革法案を成立させたことから、支持率が持ち直している。また、議会襲撃事件に関する下院特別委員会の公聴会では、事件への関与が問われるトランプを証人として召喚することになった。さらに、FBIによるトランプ邸の家宅捜索で機密文書が押収され、トランプは3人の子どもとともに金融詐欺でも提訴されている。ミシガン州で行われた中間選挙の応援演説に登壇したトランプが、相変わらず「選挙は盗まれた」としか言わないことに、聴衆もさすがに飽きたのか、途中退席者が目立ったとの報道もあった。

危機は今や世界中で複層化・深刻化している。民主主義と権威主義がせめぎ合うなか、民主主義がこれを克服できるか。方向性を占う重要な指標となるアメリカの中間選挙 (11月8日) が近い。

注

- 1 米ジャーナリズムの伝統である調査報道 (investigative reporting) では、何百人にも取材することから、複数の情報源を持つことになり、最終的にかなり正確な情報を入手することが可能になる。ウッドワードは、カール・バーンスタイン記者とともにニクソンを失脚させた1972年のウォーターゲート事件で調査報道を確立した。これについては、*All the Presidents' Men*. Simon & Schuster (1974) という著書がある。
- 2 ディープ・スロート (deep throat) とは、ウォーターゲート事件で、ウッドワードに指導する形で情報を示した、当時のニクソン政権内部の重要な情報源の人物の通称である。ここから、内部通告者一

般を指す言葉となった。

- 3 『放送通訳の現場から一難語はこうして突破する』 pp.108-113； *PERIL* p. 378；『PERIL危機』 p.515 を参照。また、*OED online*版のover-the-horizon adj.には、2001 N.Y. Times 17 May A12/6 The Chinese do not have an over-the-horizon target system that is capable of hitting U.S. forces. の例文が掲載されている。

参考文献

- ウォルフ、マイケル (2018) 『炎と怒り：トランプ政権の内幕』 藤田美菜子・関根光宏訳 早川書房
- ウッドワード、ボブ (2018) 『FEAR 恐怖の男 トランプ政権の真実』 伏見威蕃訳 日本経済新聞出版本部
- ウッドワード、ボブ (2020) 『RAGE 怒り』 伏見威蕃訳 日本経済新聞出版本部
- ウッドワード、ボブ/コスタ、ロバート (2021) 『PERIL危機』 伏見威蕃訳 日本経済新聞出版本部
- 佐藤伸行 (2016) 『ドナルド・トランプ 劇画化するアメリカと世界の悪夢』 文春新書
- 袖川裕美 (2018) 「風刺画のコミュニケーションカー『エコノミスト』(*The Economist*) の表紙III米朝首脳会談後のトランプ大統領記者会見を同時通訳して」 *MULBERRY* (愛知県立大学外国語学部英米学科論集) 第68号 pp.1-22
- 袖川裕美 (2020) 「第二回米朝首脳会談後のトランプ大統領記者会見にみるメディア戦略」 愛知県立大学外国語学部 紀要 言語・文学編第52号 pp.47-65
- 袖川裕美 (2021) 『放送通訳の現場から一難語はこうして突破する』 イカロス出版
- リー、バンディ編 (2018) 『ドナルド・トランプの危険な兆候—精神科医たちは敢えて告発する』 村松太郎訳 岩波書店
- 「トランプ演説の間に途中で帰る人が続出!?の異常事態 | ニューズウィーク日本版 オフィシャルサイト (newsweekjapan.jp)」 2022年10月3日
- Wolff, Michael (2018). *Fire and Fury: Inside the Trump White House*. Henry Hold
- Woodward, Bob (2018). *FEAR: TRUMP IN THE WHITE HOUSE*. Simon & Schuster
- Woodward, Bob (2021). *RAGE*. Simon & Schuster
- Woodward, Bob & Robert Costa, (2020). *PERIL*. Simon & Schuster.
- Elving, Ron (2021). Retrieved from [‘Peril’ Review: Bob Woodward’s New Book Uncovers The Trump Era’s Final Moments: NPR Sep.20, 2021](#)
- Green, Lloyd (2021). Retrieved from [Peril review: Bob Woodward Trump trilogy ends on note of dire warning | Books | The Guardian Sept 18, 2021](#)
- Szalai, Jennifer (2021). In Bob Woodward’s ‘Rage,’ a Reporter and a President From Different Universes - The New York Times (nytimes.com) Sept.9, 2020, Updated Sept.14, 2021.

袖川裕美

“The Trump chronicles,” *The Economist* (September 15th-21st 2018). The Economist Newspaper Limited. pp.83-84.

(そでかわ・ひろみ 外国語学部教授)